

2011/10/26  
第30号  
(23年10月号)

# しののめ



長野県総合教育センター通信

〒399-0711 長野県塩尻市大字片丘字南唐沢 6342-4  
TEL (0263) 53-8802 FAX (0263) 51-1290 E-mail [kikaku@edu-ctr.pref.nagano.jp](mailto:kikaku@edu-ctr.pref.nagano.jp)

## 新たなステージに向けて

所長 諏訪 繁範

秋本番です。秋の味覚全開の当センターの地にも、センター研修に参加された先生方の取り組み成果が、あれもこれもと風に流れて耳に入ってきています。うれしい限りです。肥えた大地であればこそ、ふさわしい時期にふさわしいものが与えられることで、大いなる収穫を期待できるものだと思います。学校教育活動においても、それは全く同じことだと思います。様々な仕掛けづくりの中で、学校目標の実現に向けて収穫が見え始めてきている時期だと思います。

さて、生徒指導専門研修の先生方は、センター研修が9月末日で終了し、新しい学校で後期の研修が始まりました。9月29日の自己課題研修報告会では、県教委担当主事そして所属校と後期研修校の校長先生方に同席いただき、全所員の前で成果と課題を含めて堂々とした発表をしてくれました。発表を聞くにつけ、立ち位置の確かさと将来の活躍を期待させてくれました。新渡戸稲造の自警録にある「我々の目的および理想が教育であるなら、全身その理想にうち満ち、することなすことがことごとく教育でなくてはならぬ」というような道を、一人一人が歩こうとしている強い決意もあらためて感じたところです。

私も専門研の先生方に「学校運営と生徒指導」というテーマで3時間ほど話をする機会をいただきました。豊かとはいえない自分の経験の中ではありますが、「教員としての職務遂行が自分づくりそのものである」と伝えたつもりです。学校も生徒も生き物であるからこそ、我々も新しい自分づくりに参画し続けなければと考えております。

9月の信州型事業仕分けの結果を受けてセンターの在り方について主管課との意見交換が進んでいます。現状をすべて肯定する立場には立ちませんが、教育に不易と流行があるからには、必然的に新しいセンターづくりも不可欠となります。先生方の力量向上あつての生徒の力量向上であります。新たなステージに向けて、センター研修の中心として、教職経験に応じた研修や生徒中心のリスクマネジメント、さらにはセンター主業務内容の精選と新たなシステムの構築等々、先生方の資質能力の向上のために準備を進めているところです。今後とも学校現場の課題に対応するとともに、新たなセンターづくりに努めてまいります。ご理解とご協力をいただくようお願いいたします。



管理研修棟西側のカツラ並木



## センター紅葉の風景



ナナカマド(上)と  
ヤマボウシ(下)の赤い実

# 研修講座探訪

9月に行われた希望研修講座を紹介します

講座名【保健室の機能アップと教育相談①  
～連携を促進するための保護者面談法～】

9月2日（金）実施（43名受講）

<講座内容>保護者面談の特徴について講義・演習

保護者の面談がなぜ難しいのか？

- 学校では必ずしも保護者のニーズが優先されない。
- 情報、方針、対応策、価値観の共有が難しい。



## 対応について



- ① 保護者と教師では「異なる役割・視点」があるという認識を持つ。
- ② 葛藤がないことが良い面談ではない。葛藤を恐れない。
- ③ 保護者の主張する背景を理解する。思いをよく聴く。
- ④ 教師の特徴を活かす。
  - ・ 対応策を提案できる。
  - ・ 今までの対応について振り返り、自分自身の対応の修正ができる。
- ⑤ チーム援助を展開し、子どもにあった目標を設定する。

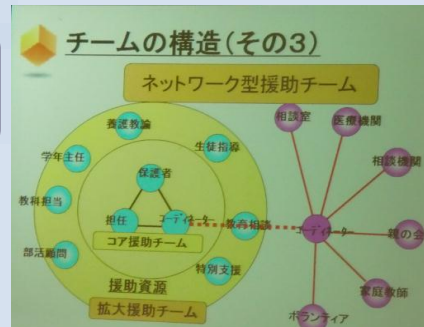
## 受講者の感想より

- ・ 相手の声を「聴く」ということの意味を根本から学びました。葛藤を恐れず、もっと子どもや大人の声聴いて、一緒に教育に携わっていきたいと思います。
- ・ 価値観の違いを共有する難しさを感じながらも、面談プロセスの構造が見えて大変勉強になりました。
- ・ 働いている中で自分の考えや行動に不安を感じることがありましたが、考え方の違いは恐れるものではなく、違いがあるからこそ子どもの多様なニーズに対応していけると思うことができ、明日から前向きに働けそうです。

連携を促進するため、チーム援助・コンサルテーション・行動分析の枠組みについても学びました。

★援助チームについて・・・

保護者を含め、異なる専門性や役割を持つ者が複数集まり、子どもを支援するために構成されたチーム。子どもが目標を達成するために、それぞれの専門性を活かして援助が行われる。



※問題状況に応じて、コア、拡大、ネットワークとチームが拡大する。

# 研修講座探訪

## 【中学から高校世代へのキャリア教育】9月22日（木）実施（37名受講）

現在、若者をめぐる社会情勢は厳しく、さらには精神的・社会的な自立の遅れも指摘されています。そのため幼保・小・中・高の各発達段階において必要な教育を体系的・系統的に進め、学校から社会生活へのすみやかな移行が大切となってきます。本講座では社会・経済の現状から生徒諸君にどのような能力・態度等を身につけさせるべきか、という視点から学校における「キャリア教育」の在り方を考察し、各学校での実践イメージを構築しました。

### <講座の内容>

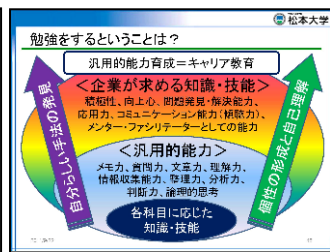
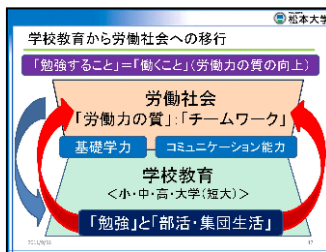
#### ①経済界からのメッセージ（講義）

経済同友会が中学生・高校生・教員にあてたメッセージから、企業がどのような人材を求めているか、現在の若者や学校に何を期待しているかを確認しました。

参考URL <http://www.doyukai.or.jp/policyproposals/articles/2010/pdf/100622b1.pdf>

#### ②社会・経済の動向とキャリア教育の在り方（講義）

なぜキャリア教育が導入しなければならないかを社会や経済の視点から考え、これからの若者にどのような意識を持たせる必要があるか、また学校教育においてどのような能力や態度等を身につけさせるべきかを考察しました。（スライドを抜粋）



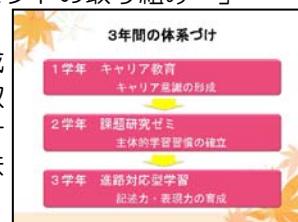
#### ③実践発表（スライドを抜粋）

飯田市立飯田西中学校「生き方教育としてのキャリア教育」  
一昨年度の風越山での林業体験学習、昨年度の農業体験学習を生徒の「生き方」を考える機会にするために、事前学習を工夫されている実践例が発表されました。「なぜ行うか？」を考えさせるとともに、林業や農業に対する問題意識を持たせて実践させることの大切さを多くの先生が感じ取られたと思います。



諏訪二葉高等学校「キャリア教育の実践と課題～Iプロジェクトの取り組み～」

激動の時代を生き抜くための「生きる力」と「創造性」を育成するために、自発的・自主的に取り組む意欲を養成すべく、キャリア教育を教育課程に位置付け全教職員で取り組んでいる実践校です。学年ごとに学ぶ内容が明確に計画されており、2年次の取り組みには多くの先生方が興味を示しておりました。



#### ④研究協議 キャリア教育の実施にむけて(質疑応答、意見交換)

### <受講者の感想から>

- ・ 中学3年間のそれぞれの段階でつけるべき力を見直す必要があると感じた。
- ・ 授業、HR、クラブ等様々な活動において、どのような能力を身につけさせるか？
- ・ 自分の経験を生徒に語りかけることも良い刺激になるかもしれない。
- ・ 社会で求められる能力を育成していくためには、学校でのビジョンを確立し、教員が統一の意識を持って実践する必要がある。
- ・ 生徒の活動を充実させるためには、事前の動機付けが重要であること、時には教師による仕掛けも必要であることを学んだ。
- ・ 今まで断片的な知識で指導していたことを痛感した。本来のキャリア教育のねらいを整理し、日常の指導から改善していきたい。
- ・ 学校教育でキャリア教育を実践するためには、まず教員の意識改革が不可欠だと思う。
- ・ 卒業生の動向から、本校としてどのような取り組みが必要なのか、検証していきたい。

## 今からでも間に合う研修講座(11月・12月開講の講座) 10月20日現在

分野	講座番号	講座名	対象	日程	募集人数
教科等	3-1-01-25	いきいき高校古典授業	高	11/22	12
	3-1-01-26	授業を通して考える中高連携国語	中高	12/1~2	11
	3-1-03-27	実践に学ぶ中高連携数学	中高特	11/10	7
	3-1-03-28	算数的活動を生かした授業	小特	11/15	9
	3-1-03-29	大学進学と高校数学教育	高特	11/17	7
	3-1-03-30	小学校算数から中学数学への橋渡し	小中特	11/29	3
	3-1-04-24	実験から展開する高校物理	中高特	11/17	2
	3-1-04-36	授業に活かす中学校化学実験	小中特	11/22	5
	3-1-05-23	高校における英語リーディング指導	高特	11/18	11
	3-1-05-25	英語力・授業カススキルアップ講座	中高特	12/1~2	6
	3-1-10-27	刃物づくりから学ぶ金属の特性	小中高特	12/1	2
教育課題	3-2-10-21	カリキュラム・マネジメント	小中	12/2	26
産業教育	3-4-12-03	工業科目に生かす環境教育	高(工)	12/2	5
	3-4-21-21	組換え実験から学ぶ食の安全	小中高特	11/17~18	1

追加募集は10日前まで受け付けています。HPで確認して電子申請で申込みをお願いします。

### モンゴル国の先生方が視察に来ました！

9月30日(金)にモンゴル国から東京学芸大学に研修に来られている先生方22名が視察に来られました。現在モンゴル国では教育改革が進められており、今回の研修では教職員研修システムの構築について学ばれているそうです。その一環として、地方における教職員研修の実態を学ぶことを目的に、東京学芸大学の教員4名と共同研究員2名、通訳3名とともに来所されました。

当日は、松本市内(旧開智学校、松本城)を見学され、当センター到着、食堂にていつもの“定食”で昼食をとっていただきました。それから、第1研修室にて次長による歓迎の挨拶、事業説明が通訳を介して行われました。事業説明ではモンゴル語に訳されたスライドを活用しており、モンゴルの先生方は通訳される話やスライドから、一生懸命メモを取りながら学ばれている姿が印象的でした。



質疑応答では多くの質問が出されました。「あなたはなぜここで働いているのか？」という質問には、担当した主事も回答に困ってしまいましたが、モンゴル国の教育現場には“人事異動”という制度はなく、異動辞令を受けてここで働いていることにびっくりしていました。その後、CIM研修室にて商業高校生の実習の様子やロボットの見学、実際に行われている産業教育の研修講座の見学を行いました。



最後に「モンゴルでも日本でも子どもたちの健やかな成長と学力の定着という願いは変わらない。ともに頑張りましょう！」と拍手で締めくくられた視察でした。

モンゴル国の教育の発展をお祈りします。



# 体験的研修を中心とした研修紹介

## 10 年経験者研修

### 異業種体験研修・社会体験研修

10 年経験者研修の一環として、7 月から 8 月にかけて、小・中・特別支援学校は異業種体験研修が、高校は社会体験研修が行われました。以下に受講者の感想の一端を紹介します。

<受講者の感想>

- ・現場に入ってから落ち着くまで、水も口にすることなく 6 時間ひたすら立ち仕事で、次々と作業をこなした。それは、納品に間に合わせるため、消費者に合わせて仕事をしていることを痛感させられた。この研修は職業観を学ぶよい機会になった。(高校)
- ・真夏の炎天下で刈払機を背負い、長袖、長ズボンで、アブやハチに気をつけながら行う作業は、大変体力的にきついものがあった。スギを育てる 50~60 年の間に、下草刈り、枝打ち、間伐など、目に見えない作業が非常にたくさんあり、苦勞も多いことがよくわかった。地域の大切な産業であり、守っていく必要がある。(小学校)

## 高等学校初任者研修

### 夏期宿泊研修 自然体験研修

夏期宿泊研修の 3 日目に自然体験研修を行いました。2 班に分かれ、林業総合センターでは、事業内容の説明を受けた後、まき割り、ブルーシートを使った簡易シェルターづくり、樹木測定、枝打ちハシゴによる木登り高所体験及び飯盒炊きさん等の体験研修を行いました。野菜花き試験場では、野菜花き試験場の業務内容についての説明の後、5 グループに分かれトマト、トウモロコシ、そば等の管理や収穫、レタスや大根の採種、病害虫防除具の作成及びバイオテクノロジーによる植物栽培等について体験を行い、貴重な研修になりました。

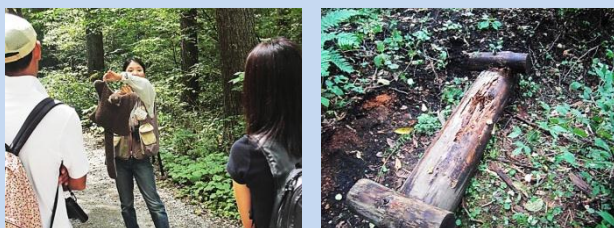


レタスの採種を行う受講者

## 高等学校 10 年経験者研修 地域研修

「地域研修」は、地域に学び、視野を広げることがねらいです。A~D の 4 講座の中から 1 講座を選択し、体験活動を通して研修します。

地域研修 B は、軽井沢星野リゾートピッキオにおいて「エコツアー事業」を体験し、教育のホスピタリティについて考えました。エコツアーでの講師の所作から、参加者の満足度を高めた要因を考えました。この演習を通して、生徒が満足できる授業を創造する必要感を高めた研修でした。



説明で惹きつける工夫を学ぶ受講者・クマの食事の跡

## 高等学校管理職社会福祉体験研修

高校の管理職が 7 月下旬から 8 月上旬にかけて、県内各地区の特別養護老人ホーム 10 施設において、2 日間の体験研修を行いました。以下に、受講者の感想の一端を紹介します。

<受講者の感想>

- ・加速する高齢化社会の中で地域に住むお年寄りが尊厳を保ちながら年齢を重ねていく様子を間近で拝見し、地域で支える老人福祉のあるべき姿に教えられ、有意義な研修となった。
- ・ある利用者の方が「この人達は、皆よくしてくれて優しい。」とおっしゃっていた。一人一人の利用者の方に目配り、気配り、心配りをし、疲れた顔、嫌な顔を一切見せない職員の方々の姿勢が印象的であった。学校現場でも必要な姿であると感じるとともに、プロ意識の高さを感じた。

